



ラジャアンパット (Raja Ampat) は
 パプア・ニューギニアの西側にある
 インドネシア領。
 以前は「秘境 イリアンジャヤ」と
 呼ばれていた海域で、4つの大きな島を含む
 640もの島々が点在している。
 多様な潮流に洗われた海中世界は、
 未開の部分がほとんどで、
 原初の海が広がっている。
 これまでにダイビング媒体で
 紹介されることなかったこの秘境の海を、
 豪華ダイブクルーズ船
 オデッシー1号で乗船取材を行ってきた。
 (取材時期・2月24日～3月3日2007年)



01: 静かな入り江で停泊するオデッシー1号
 02: マンタポイントでは高確率でマンタに会える
 03: カクレクマノミなどアイドル種もたくさん
 04: ディンギーに乗り、いざダイビングへ!

本邦初公開! 鍵井カメラマンが激写!

オデッシー1号で巡る

Raja Ampat Cruise

ラジャアンパット・クルーズ

錚々たる
 美しい海の
 航海日誌

Photo & Text : **Yasuaki Kagii**
 Special Thanks : **World Tour Planners Odysseadivers**

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Web-lue 2007. Spring

Information Link  <http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html> 関連情報HPへ



魚の楽園の入り口へ ラジャアンパット

2月25日 (航海1日目)

昼食後、午後2時に出航したオデッセー1号は、約1時間走行し、最初のダイビングポイントへ向かう。到着したのは、Matan Islandと言う小さな白いビーチのある島。

エントリーしたのは、「South Matan」というポイントで、なだらかな砂地の傾斜とサンゴ礁のリーフが続く。まずは砂地でジョーフィッシュやハゼの仲間、カミノリウオなど、ガイドのアンディが巧みに見せてくれる。ダイビング前にガイド陣が、「ここは、まだラジャアンパットの入り口で、まだまだですから……」と言っていたが、そんなことはない。特にリーフにたどり着くと、インギンチャクやソフトコーラルなどがサンゴ礁の周りにボサボサ生えて、とてもワイルドな感じ。まさに色彩も生物もごちゃ混ぜの海が広がっていた。これからの5日間が大変楽しみだ。他のグループはオオセというサメを見ていた。私も見たかった……。

エキジット後、2時間の移動。ホットサンドなどの軽食が用意されている。

船が少し揺れ始めたので、2階の図書スペースで横になりながら海外の写真集を眺めていた。他のゲストもリビングなどで横になり寛いでいる。揺れは時折大きくなり、ナイトダイビングのポイントへ行くことを断念し、今日はそのまま、宴&夕食へ突入した。「お疲れ様～」とビールを開ける音が船内に響く。ダイバーの皆さんはよく飲むな～と關心しながら、初顔合わせで、これから数日間、クルーズを共にする面々と互い親交を深める。驚いたのは、皆さんが様々な種類のお酒を持参していたこと。ワイン、焼酎、日本酒など。ただでさえ荷物の多いダイバーなのに、さすがである。で、その夜の宴は夜中の1時まで粛々と続いた。

DAY'S_01

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring

Information Link  <http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>

2月26日 (航海2日目)

朝7時前に起床。ゲストのみんなも次々に起きてくる。ダイビングベルが7時20分に鳴った。朝食前の朝1本目のダイビングは、Batanta島の北東に位置する「X Point」というポイント。本当は夜の間にもう少し西に行く予定が、海況が安定しないため、少々足止めを食らっている状態。それでもダイビングはとても面白かった。なだらかな斜面を潮に乗ってゆっくりダイビングをしていくと、ガイドのアンディが黄色いビグミーシーホースやウミウシの仲間を見せてくれる。また、嬉しい出会いはSpendid dottybackというメギスの仲間との出会い。ブルーラインが美しくとても目立つ存在。その他にも、キハツソクやシモフリタナバタウオなどもいる。後半少し水深を上げると、約5mのリーフトップまで色鮮やかだった。それは他の海ではやや深い深度に群生している黄色いカイメンなどがリーフを広く覆っていたため。温かな太陽の光に吸い寄せられるように、様々な色彩が浅瀬まで上がってきているよう。その上にはキングギョハナダイ、メラネティアン・アンティアスが

多く舞っていた。

朝食後、11時からのダイビングまでの間、少しノーケリングをする。2本目は「Batanta」というポイントで、ここがまた面白かった。エントリーした辺りは白い砂地が広がり、造礁サンゴがとても発達していた。砂地ではジョーフィッシュやハゼの仲間などを観察する。ここは爽やかな癒し系のポイントだと思い進んでいくと、今度はサンゴだけでなく、腔腸類の群生も混在するようになる。色の洪水のような海中世界へと変化していく。ガイドが根の隙間を指差すと、50センチ大の子供のオオセ(サメの仲間)がいた。なかなかかわいいと思いながら、撮影を開始。他のゲストはEpaulette sharkの仲間やヒメイトマキエイなども見ていたとのこと。正直、名もなきダイビングポイントだったけど、みんな納得の素敵なポイントだった。

*

昼食後、少し移動、その途中はサンデッキでお休み。めっちゃめっちゃ強い日差しが全身を突き刺す感じ。男性は日向。女性は日陰。

3本目のダイビングは「Palau Nelayan」。現地の言葉で、漁民の島という意味。少し早い潮流の中、リーフを左手に進んでいくと、ブルーウォーターにウメイロモドキやハナム口の仲間の群れが泳いでいく。リーフは相変わらずジャングルのようなサンゴをはじめ、様々な生き物で埋め尽くされている。これと言った特別な生物との出会いはなかったが、浅瀬に広がるエダサンゴ群生など、生命の息吹が溢れているようだった。他のグループはまた大きなオオセを見たという、全てのダイビングで見、その都度、個体が大きくなっているようだ。羨ましい……。

4本目のダイビングも少し移動して、「Teluk Batanta Utara」と言う大きな湾で潜る。エントリーが5時30分頃で、ロケーションはサンゴのガレ場と白い砂地のポイント。何匹ものジョーフィッシュが巣穴から全身を出しては中層を泳いでいる。またカニハゼ、ウミウシなどの小物ウォッチングが楽しい。後半になると、もうサンセットダイブのような明るさになり、浅瀬のサンゴ礁では、様々なリーフフィッシュがあちらこちらと逃げ惑うように今晚

の寝所を探していた。その様子を見ていると、あまりお邪魔するのもなんだと思い、少し後ろ髪を引かれつつもエキジットした。水面上の空はもう暮れ色になっていた。

夕食の後、ある女性ゲストの誕生日だった。みんなでサンデッキに集まり、スタッフがギターを奏で、誕生日ソングを歌う。シェフは甘さ控えめの誕生日ケーキを作ってくれた。お手製のパーティーで大いに盛り上がった。その宴はまたしても日付を超えてしまった。

01: ビグミーシーホースは定番
02: 多彩な色彩のウミウシも多く見つかる
03: 水中でとても目立つSpendid dottyback
04: 暮れ色に染まるまでダイビングは続く
05: 陽気なスタッフがパーティーを盛り上げてくれる

朝も昼も夜も賑やかなクルーズの毎日



01



02



03



04



05

DAY'S_02

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring

Information Link  関連情報HPへ
<http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>



01



02

温かな太陽の光に吸い寄せられるように、様々な色彩が浅瀬まで上がってきているようだ

- 01: キンギョハナダイが舞うサンゴの根
- 02: 島の景色も美しい
- 03: 静かな場所で水面集合
- 04: 豊かなサンゴ礁が永延と続く



03



04

DAY'S_02

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring

Information Link  関連情報HPへ
<http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>

朝からこのように
命溢れる海で潜れること、
幸せを感じる。



01



02



03



04



05



06



07

2月27日 (航海3日目)

朝早く目が覚めると、すでに船は走り出していた。波ひとつなく、快調な走り出し。昨日までの心配がまるで嘘のように、船は事もなく新しい朝のなかで動き出していた。行き先はKri島。選ばれた1本目のダイビングポイントは「West Cape Kri」。リーフを右手にまず、潮に向かって進み、潮辺りの一番良いとこで待っていると、ギンガメアジやバラクーダの群れが舞う。そこにミサイルのようなイソマグロが3本。底にはナポレオンが泳ぎ過ぎる。そこには昨日までとは違った景観があった。中層を見上げると蒼き水の先でダイバーに人気の魚が集合していた。と同時にここもやはりマクロの生物は充実していた。今日のガイドのクリスは、ソフトコーラルに擬態する甲殻類をよく見つけてくれる。その他に残念ながら尻尾しか見えなかったが Epaulette shark の仲間も教えてくれた。安全停止の間、トッピーのサンゴ礁の上を流す。なんて美しいサンゴ礁なんだろう、とため息がでる。サンゴ間がギュウギュウとしていて、シダ類がボ

サボサ生えている。その上を何種類ものリーフフィッシュが自由に泳いでいる。朝からこのように命溢れる海で潜れること、幸せを感じる。

2本目はマンタポイント。まず本船からマンタを確認。そしてガイドを先頭に縦横無尽にマンタを目標に泳ぐ。潮の流れが強ければ、強いほど、たくさんマンタが集まってくるようで、先週は20匹のマンタが見られたそうだ。今回は最初に1回、最後に1回、大きなブラックマンタが目の前で身を翻しては、蒼い海の向こうに消えて行った。マンタだけではなく、コウイカの仲間、ニシキフウライウオも楽しめた1本となった。しかし、マンタはもう少し見たいということで、また明日に再チャレンジするという。明日に期待!

*

3本目は魚影を求めてガイドがポイントを選択。「West Cape Kri」と言い、今日の1本目のポイントとは反対側に位置するポイントでエントリーする。潮の流れに乗りながら、コーナーに近づいていくと、ギンガメアジの大きな群れが水深10m辺り

で群泳していた。そこにバラクーダの小規模な群れやハナム口の群れが混じり、壮大な光景を創り出す。体長1m超のロウニンアジが大きな頭と目でパトロールしている。そのロウニンアジがスピードを上げる時、海が動く。海中が「ザッ」力強くどよめく。また、このポイントの魅力はリーフにもある。やたら大きいイソバナなどの腔腸類がドンドンと連立している。そこを棲家にする生物も豊富だ。そして何よりも驚いたのが、ガイドのクリスがヒポカンポスと呼ばれる米粒大のピグミーシーホースの仲間を2個体も見つけたこと。その眼力に脱帽するばかりだ。

4本目のポイントは、「Mios Kou」。無人島のハウスリーフでダイビング。エントリーすると水深約10mの根を中心に、ヨスジフエダイやキンセンフエダイの大小の群れが泳いでいた。最も密度が濃い群れで撮影を開始すると足元にびっしりとキンメドキも群れていた。時折、カスミアジがやって来て、その群れを壊す。夕方近くにエントリーのためか、海の中が少し賑わっているように思えた。

その後もギンボやメギスなどの様々な生き物を撮影する。そしてガイドのクリスに呼ばれて行くと、またヒポカンポスを2匹見せてもらった。1匹は撮影したが、もう1匹は撮影しないと断る。さすがにいくら珍しいとは言え、4個体はいらない。エキジットの直前にオオセを発見。1mほどの大物で、迫力がある。正面、真横から撮影するが、ガレ場に擬態しているようになかなか上手く撮影できない。それでも、なんとか形がわかるようにして撮影終了。他のゲストはニシキフウライウオのオス同士の格闘シーンに出会えたそうだ。予定潜水時間の60分を超え、水面に顔を上げると、太陽はもう既に海に沈んでいた。

- 01: ワイルドなサンゴの森
- 02: ホヤの上でモデルになってくれたタテジマヘビギンボ
- 03: 威嚇するコウイカ
- 04: 華やかなニシキフウライウオ
- 05: 幼魚から成魚までいる Spendid dottyback
- 06: リボンスイトリップスの瞳
- 07: サンゴに擬態するエビの仲間

DAY'S 03

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring

Information Link  <http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>

魚群、マクロの魚、
とにかく魚まみれの
毎ダイブ！



DAY'S_03

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring

 Information Link  関連情報HPへ
<http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>



01



02

桟橋「Jetty」ダイブはやっぱり面白い!

2月28日 (航海4日目)

朝目覚めると船はすでに出港し、マンタポイントを周回していた。しかし、まだ潮の流れが十分でないということで、エントリー時間を7時30分から8時に変更する。それまでは、軽い朝食やコーヒー、ジョースなどで少し休憩する。

8時前に「さっ!マンタポイント」と思いきや、まだまだ潮の流れが十分でないと言うことでまず「Areborek Jetty」に行くことになった。ここは大変有名なポイントで、アジアダイバーという雑誌で人気ランキングの上位に入るくらいである。前回のクルーズ(7月)ではホソヒラアジやイワシの群れが視界を覆うほど群れていたようだ。今回は残念ながらそれほどの群れには遭遇することはできなかったが、それでもカスマアジなどに追いかけられて逃げ惑う群泳と一緒に潜ることができた。そして、何と言っても今回の最大のヒットはカムリブダイの群れだ。まるで水中でドッ、ドッ

と音を鳴らしながら行進しているようなイメージ。先頭に行くダイビンググループとの遭遇時は、警戒心も薄かったようで、ゲストがすごい写真を撮影したので、それを拝借。この写真は、コンパクトデジカメで撮影された。私はと言えば、頑張って撮影したもの、水中でカメラの操作ミスを行い、撮影したデータを全消去してしまった。それは水中での初めてのアクシデントだった。これまでそんな失敗はなかったのに。多分、カムリブダイの群れに興奮していたのだと思う。それほどインパクトが強いものだったと少し言い訳なんかしてみよう……。それにしてもなんてこったです。

- 01: Tailspot Blennyもたくさん見つかる
- 02: ここが舞台となる桟橋
- 03: 桟橋の木漏れ日の下、無数のホソヒラアジが泳ぐ
- 04: 圧倒的だったカムリブダイの群れ(写真・岸野英子)



03



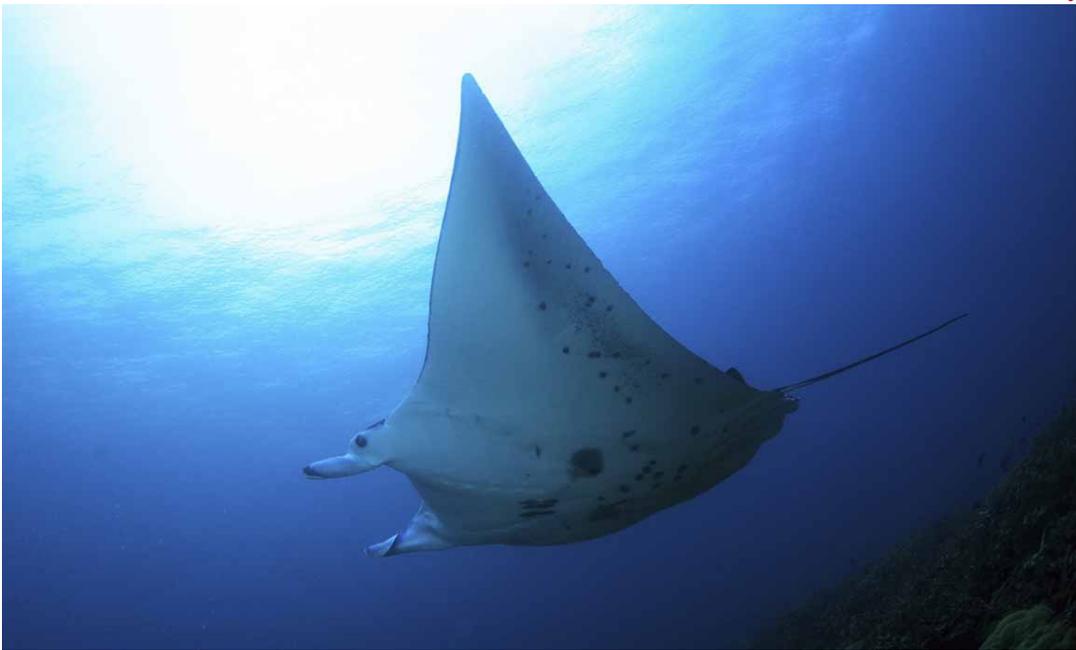
04

DAY'S_04

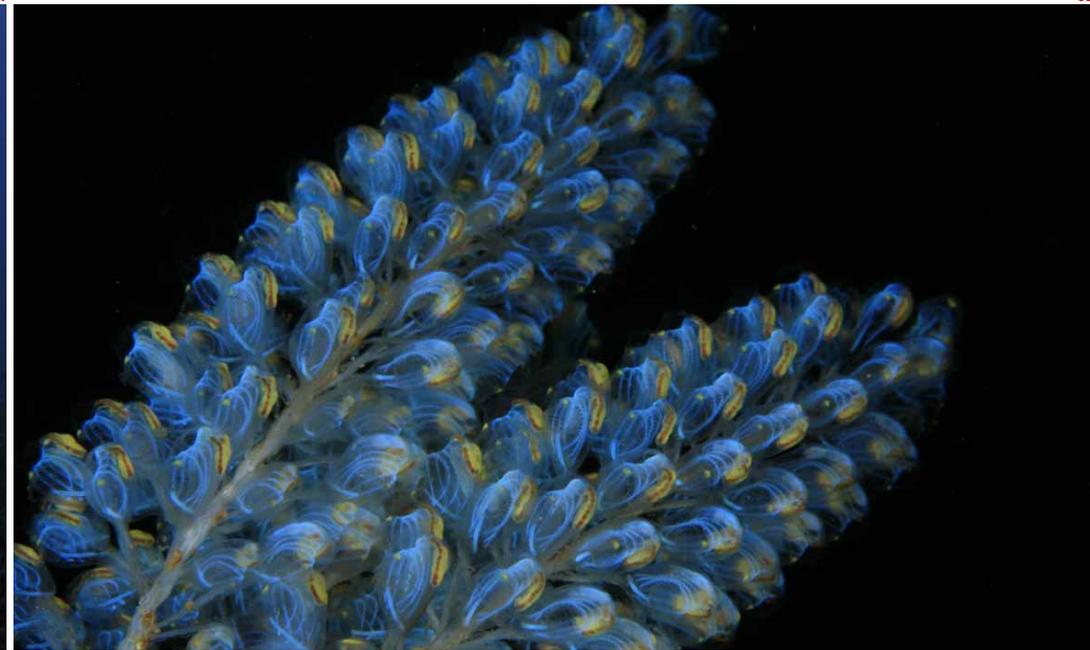
Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring

Information Link  <http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>



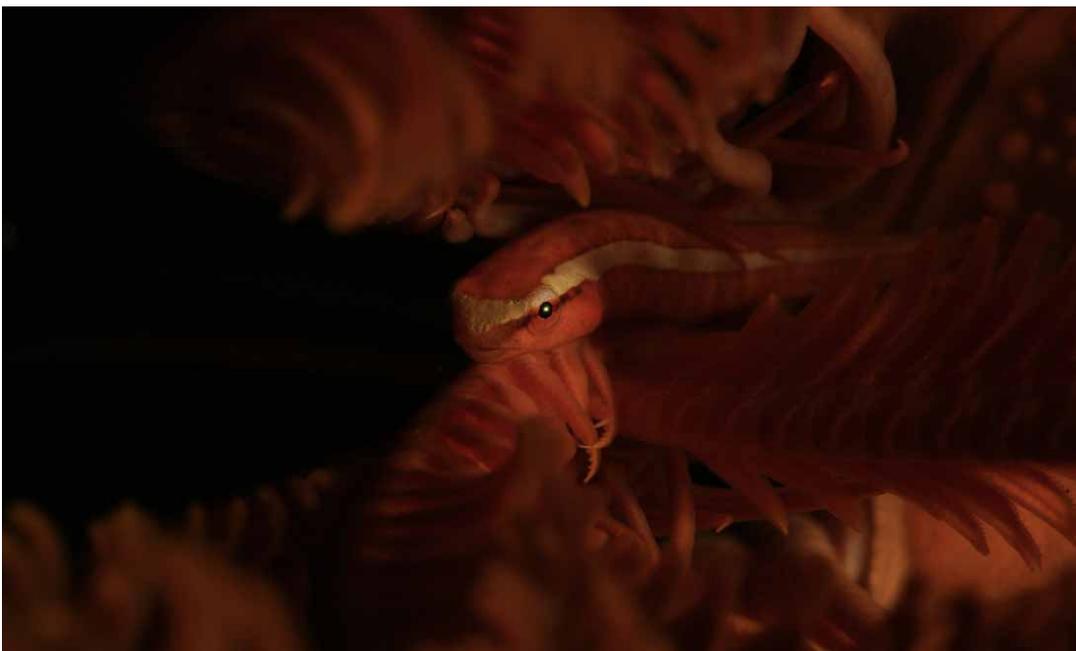
01



02

マンタは白と黒が登場！ そして未知の世界への誘い！

01:約束どおりに現われてくれたマンタ
02:まるで葡萄のような面白いホヤ
03:ウミシダの穂むウバウオ
04:豊かなサンゴ礁とイソバナが競演



03



04

DAY'S_04

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Information Link  <http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>



01

2本目は念願のマantaポイント(Manta Point)へ。結論から言えば、4枚のマantaに遭遇。エントリーしてすぐに頭上に2枚が泳いでいく。2枚ともお腹の白い通常のマanta。そしてリーフの上でクリーニングされていたブラックマantaを発見。大きい固体で、カメラを持ったゲストのみんなとジリジリ詰め寄ったが、撮影できる範囲外で身を翻された。その後も、みんなで頭上を見上げながら、マantaを待つ。潮流は割と早く、みんなはカレントフックを使って鯉のぼり状態を楽しむ。ユメウメイロとコショウダイの群れが青い海に映える。他のゲストはカメとにらめっこして写真を撮っていたそうだ。そして最後に大きなマantaが目の前を通りすぎ、マantaダイブは終わった。例えば、モルディブのマantaポイントのようなクリーニングシーンでの遭遇は叶わなかったが、それでも、自由に泳ぎ行くマantaの姿は脳裏に焼きついている。

3本目は「Mike's Point」にエントリー。Gam島とKri島の小さな無人島の周囲を潜る。今潜り終えて、この日誌を書いているが、正直、最高のポ

イントだった。特に、ダイビングの後半に向かった水面下5mほどの世界は素晴らしかった。いくつも重なり合うテーブルコーラルと大きなイソバナが連綿と続いている。憎たらしいほど力強い骨格を

持ったエダサンゴも目にした。その周囲にはハナム口の若魚が群れ、数匹ものロウニンアジが徘徊している。ひとつひとつは当たり前のことで、ただそれが、ちゃんと揃っているということ。何も欠けていない。人それぞれの受け止め方は違うが、今の私にとってこのポイントはこれまで経験したダイビングポイント中でもベスト1になり得るものだった。サンゴ礁を含め、少しずつ海の様子が変わっていく昨今、私は少し悲観的になっていた。だから、

ダイビングの後の心地よい疲れ、 それを癒してくれる 地元のビール&天然レストラン！

これほどまでに手付かずの海に潜れると、正直、今は涙が出るほど感動してしまう。全体的なこのポイントの魅力は少し深場にあるオーバーハング周辺。その辺りにリボンスイートリップスとアヤコシヨ

ウダイの群れがたくさんいる。なぜか、海底にへばり付くように群れていて、まるで泳ぐことに飽きた、もしくは放棄した魚たちがたむろっているようだった。そんな行動をこれまでに見たことがなかった。新しい海に潜るということは、新しい発見を伴うので、大変嬉しく思った。

4本目のポイントは「Batu Lima」。ここも小さな無人島の周囲を潜る。天候が曇りとなり、太陽の光が弱くなったが、エントリーと同時にユメウメ



02

01: キャンプファイヤーを囲み、踊るゲスト&スタッフ
02: これが最高の時、「乾杯！！」
03: ご馳走がテーブルの上にドカンと並ぶ



03

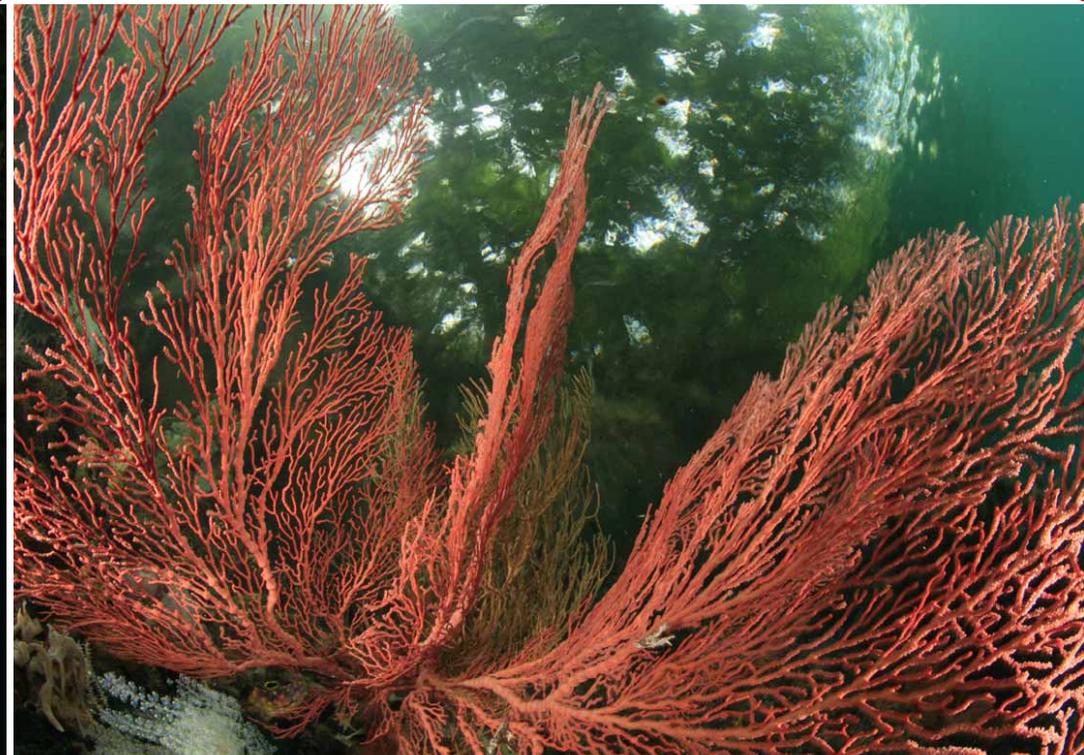
イロに囲まれ、心地良くダイビングが始まった。ガイドのクリスの後を付いていくと、様々な生き物を披露してくれる。他のゲストもカニハゼ、オオセ、マダラトビエイなどを見たという。大きなイソバナに無数のテンジクダイが群れていた。一緒に潜っている岸野さんが、その「凝縮された小宇宙」に感嘆しているのがわかった。最後に大きなケーブを通ってエキジットし、その日のダイビングを十二分に満喫して本船に戻った。

*

夜はビーチでBBQが催された。新鮮な魚料理、チキン、野菜炒め、フライドポテトなどが大きなお皿に山盛りでテーブルの上を占領していた。最も人気だったのはイカの炒め物とお酒のアテに最高だった。天然のレストランのホワイトサンドカーベットを素足で確かめつつ、ビールを飲む。スタッフはギターを奏で、太鼓を叩いては、歌を披露してくれる。というよりも自分たちの楽しみといった感じ(笑)。楽しいのは大変結構だ。最後に大きな焚き火を囲み、みんなで踊った。楽しい時間は過ぎるのが早い。



01



02

3月1日 (航海5日目)

朝起きてすぐにブリーフィング。いつも通りのスケジュールだが、7時半までぐっすり眠っていた。今日は楽しみにしていたポイントで1本目のダイビングを行う。Gam島とWaigeo島の間にあるKabui Straitという水路で「The Passage」という名前が付いている。

パラオのロックアイランドのような景観の中をポートで進み、まずは大きな穴のぽっかりと開いた地形ダイビングを楽しむ。水面から森の様子が見え、幻想的な雰囲気がとても良い。そして、潮の流れ

に乗って少し奥へ進んでいく。潮流は割りと強く、ウミウシなどの生物の上を飛んでいく。潮が落ちていくとオレンジ色の畑が広がる。小さなソフトコーラルが一面に咲いている。ここはほとんどダイバーが来たことのない未踏の地。まるで本当に秘密の花園のようだった。ここでのダイビング中、私はひとつの決断をした。それは来期もこの海に再来するという。それは、もっとここで潜りたいという気持ちから。まだ人の知らない世界に浸る幸せ。そして無垢な自然をまず自分の

手で撮影したいという功名心もある。また正直なところ、想定外の大胆な色彩が迫ってきたために少し戸惑い、うまく撮影できたか?と少し不安も残った。次回はもう少し心静かにじっくりこのポイントを見渡し、撮影をしたいと考えている。

*

潜っているときのこのダイビングポイントの印象は、川のようなだったので、一度レギュを離して水を口に含んでみた。やっぱり塩っ辛かった。また面白い世界を見つけた。

- 01: 面白い地形からエントリーする
- 02: 赤いイソバナのすぐ上に森が見える
- 03: ここも宇宙人のようなホヤがいっぱい
- 04: ディンギーで森へ奥へと向かう



03



04

不思議な環境でのダイビングもラジャアンパットは得意です!

DAY'S_05

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring



01



02



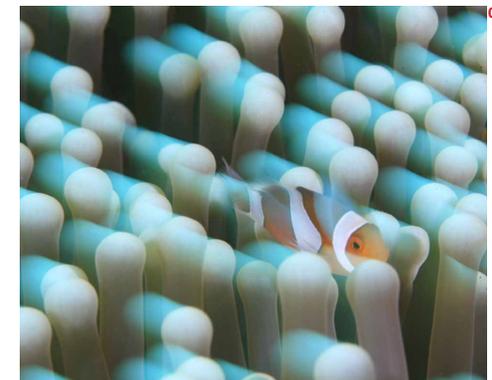
03

01:「泳ぐオオセ」を激写！
 02:宝石のような鮮やかなGoldbelly Damselfish
 03:イエローフィンバラクーダも登場！
 04:カクレクマノミはいつでも良きモデルになってくれる

2本目のポイントはぐっと南下して、「Surdine Reef」へ。潮当たりの良い大きなリーフの周囲を潜る。エントリーしてすぐに海底にバラクーダの群れを見かけ、急潜行。10数匹のバラクーダとご対面を果たす。そのまま潮の流れに乗り、リーフの斜面に向かう。ゆっくりじっくり観察して進んでいくと、ガイドのジョンが大きなオオセを見つけてくれた。何枚か撮影していると、ストロボ光を嫌ったのか、泳ぎ始めたので、私のその横にぴったりと張り付き、「泳ぐオオセ」を撮影してしまった。その画像をダ

イビングの後にゲストの方に見てもらったが、「泳ぐイメージがないので、やらせっぽい」と言われた。一所懸命に頑張ってたのですが……。その後はクマノミなどを撮影する。ダイビング後半になると3つのグループがごちゃ混ぜになった。みんなは下を向いてまるで宝物での探しているようだった。自分で何かを見つけようとして、それに応えてくれる海はやっぱり良いと思う。そして、自分では見つけれないものはガイドさんが披露してくれる。

みんなで
宝物探しを楽しむ!



04

DAY'S_05

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring



01

昼食の後、3本目は「Chicken Reef」ここでまたタマゲテしまった。ポイントの感じは2本目の「Surdine Reef」に似ている。潮の流れに乗ってリーフ沿いを行くと、クマザサハナム口の群れが視界を覆った。このポイントでの群れはこれだけではなかった……。ハギの群れはまるで雲海のように海に現われ、形を変えては、まるでバケモノのように私たちの前に立ちはだかった。そして、ツバメウオ、ナンヨウツバメウオの混成チームやウメイロモドキやムレハタタテダイのカラフルなコンビの群れも続いている。ギンガメアジやバラクーダはいないけど、様々な種類の魚が群れている。「魚の坩堝」と言った感じ。その他にもタイマイとゆったり泳ぐこともできた。

エキジット後は、お腹も胸もいっぱいになっていた。こんな海、これまで出会ったことがなかった。私は、まったくラジャアンパットの海に恋に落ちてしまった。

4本目のダイビングも用意されていたが、私は3本で終了。みんなは「Saunek Jetty」へ向かった。ツマジロオコゼやワニゴチなど変な子ちゃんのオンパレードだったとゲストのみんなは笑顔で帰船し、全てのダイビングを楽しく、無事に終了した。

夜はパーティーになったのは言うまでもない。途中みんなでサンデッキに向かった。ソロン港に向かって走行するオデッシー1号と私たちは耀い月の光に包まれていた。



02

03

潜り終えて、浮かんだ言葉は
「魚の坩堝」。
本当に最高だった……。



04

01:タイマイと泳いで、最後のダイビングを迎えた
02:テングハギモドキの群れは半端ではなかった。
03:クダゴンベも良きモデルになってくれた
04:サンデッキから見上げれば、美しい夜空が……

DAY'S_05

Raja Ampat Cruise

Web-lue 2007. Spring

Information Link  関連情報HPへ
<http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>

01



02



03



04



05

インドネシアの海を 縦横無尽に駆け回る 豪華クルーズ船の魅力

Odyssea 1

01: デジタルルーム
02: スタンダードルーム
03: オデッセイ1号の全景
04: 朝食はフルーツも盛りだくさん
05: 後方はダイビングデッキ
06: 美味しい料理はbuffet方式
07: 広いサンデッキ&スターゲイズラウンジ

06



オデッセイ1号(Odyssea1)は2006年4月に就航したラグジュアリーなダイブクルーズ船。ダイブクルーズが人気を博すモルディブのクルーズ船クラスの船が、インドネシアにも誕生した。全長35m、最大幅8mの温もりのある大きな木造船で、「動くリゾート」といった形容がよく似合う。設備やサービスも充実し、快適なクルーズライフを楽しむことができる。

客室はスタンダードルーム×6室、デラックスルーム×2室。全ての客室にエアコン、シャワー・トイレ、セーフティボックス、バスタオル、バスローブ、シャンプー、ボディソープ、ドライヤーが完備されている。ダイニングルームは広く、ゆったりと寛ぎのスペース。食事はビュッフェ形式で、肉料理、海鮮料理を始め、野菜、ライス、フルーツなど。味付けは日本人好みでつつい食べ過ぎてしまう可能性も……(笑)。アルコール以外の飲料、スナック類は全て無料とこれまた嬉しい(ビンタンビールはDR25,000)。

またダイビングの合間にケーキやクッキーが用意されるので、空腹になっている暇がない(?)満腹クルーズになる!

その他の施設として、撮影した画像の焼付けなどを行えるデジタルルームやDVDデッキやX-BOXが装備されているプレイルーム、最大30名でのパーティも可能なサンデッキ&スターゲイズラウンジなどリゾート並の充実ぶりだ。

07



>> 多彩なコースも魅力!!

Odyssea1ではブナケン・バンカ・レンベエリアを巡る4泊5日クルーズ、ブナケン・バンカ・レンベの他サンギへ諸島(海底火山)まで北上する5泊6日ツアー、そして西パプアのラジャ・アンパットへの6泊7日(5泊6日)のロングクルーズまでクルーズツアーを展開している

Ship_Guide

Raja Ampat Cruise

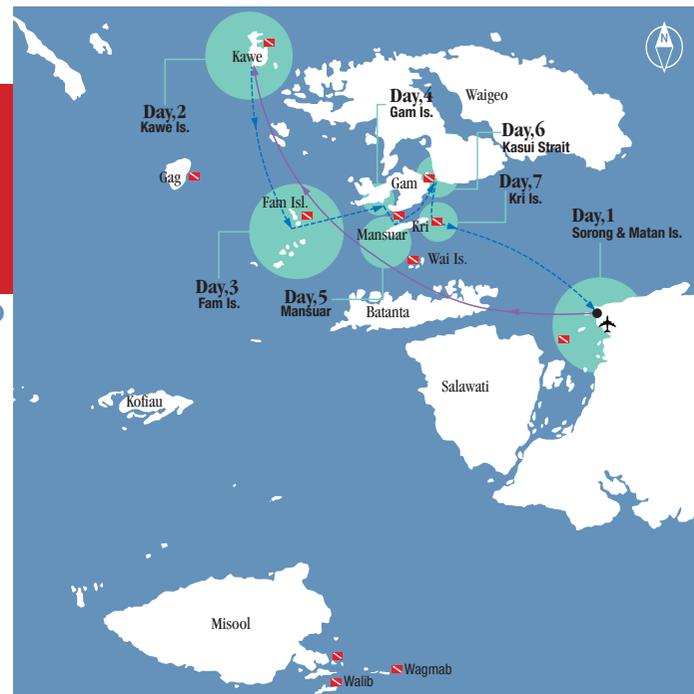
Web-lue 2007. Spring

Information Link  関連情報HPへ
<http://www.wtp.co.jp/renewal/raja/index.html>



Information

Cruise Map



>>ダイビングスタイル

ダイビングは1日最大4本。4本目はサンセットダイブ、またはナイトダイビング。

ガイド付きの少人数のグループで最大潜水時間は約50分。エントリーは本船の後方デッキ、若しくは装備されている2隻のディンギーから行う。ラジャアンパツでは、なだらかな傾斜のポイントが多く、垂直のドロップオフの地形はほとんど見かけない。潮の流れはあまりないポイントばかりだが、ギンガメアジやバラクーダと言った大物を見る場合は潮流がわりとある。またマンタポイントに関して、潮流があればあるほど、遭遇の可能性が高いと言われている。実際、今回の取材でもマンタポイントも流れがあった。

本船後方のダイブデッキは広く、着替え、カメラのセッティングなど十分なスペースが確保できる。機材のセッティングや毎回のウェットスーツの洗浄など、船上でも「殿様・姫様ダイビング」を楽しめる。またカメラに関してスタッフが運んでくれるため大変楽だ。ダイビング用のタオル、お水なども個人分が用意されているため、快適にクルーズダイビングライフを楽しむことができる。

>>ラジャアンパツへの道のり

成田空港～ジャカルタへ。ジャカルタ空港での乗り継ぎ時間は約4時間用意されているので、国際線から国内線カウンター(メルパチ航空)でチェックインを済ませる。その際にカウンターで空港使用税(30000ルフィア)を支払う。その後、空港内にあるレストランで軽い軽食など取っていると休憩もでき、程好い時間になる。そして、次の目的地であるスラウェシ島の南部にあるマカッサルに向かう。飛行時間は約2時間。マカッサル空港に到着後、乗り継ぎカウンターに向かう途中に、次のソロン行きのチケットを確認するカウンターがあり、そこで「TORANZIT」のスタンプを押してもらい搭乗の確認。再度、荷物検査の前に空港使用税を払うカウンターがあるが、それはジャカルタ空港で済ませているため、「トランジット」と言って購入せずに通過する。マカッサルで空港のトランジットは約1時間程。そして最終目的地であるソロンまで向かう。搭乗時間は約3時間だが、途中メナド空港に立ち寄ることもある。その場合メナド空港で一度飛行機から降り、待合室で待機。再搭乗後、約1時間でソロン空港へ。到着予定

時刻は約7時30分。送迎車で約10分走るとソロン港に着き、そこにオデッシー1号が待機している。

乗船後、ラジャアンパツクルーズではUS\$15/泊のクルーズ燃油サーチャージとUS\$30の港湾使用料を払う(2007年1月1日時点)。

帰りは、行きと同じルートを辿る。まずソロンからマカッサルへのフライトだが、メナド空港でのトランジットはない予定(ソロンでの空港使用料は11000ルフィア)。マカッサル到着後、行きと同じように途中のカウンターでチケットのチェック。ジャカルタ空港では長いトランジット時間がある。日本へは深夜フライトになり機内で夕食が出ないので、トランジットの時間に夕食を食べることをお勧めしたい。

また、ジャカルタ空港国際線出発時の空港使用料は100000Rp.お忘れなく。



オサガメに会いたい!

現在、ソロン周辺でオサガメの産卵情報も入手しています。来期は、産卵観察を含めたツアーも考えております。今後の展開にご注目ください。

(Photo By オデッシーダイバーズ)